
あかペンのゆくえ それはイブの夜に

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかペンのゆくえ

それはイブの夜に

【Zコード】

N1857D

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

小学校教諭の林田沙由奈は隣のデスクのボサボサ頭でよれよれジャージの植山達樹にいつも頭を悩ませている。貸した赤ペンも返つてこないまま。ある日突然植山が車で家まで送ると言い出した。そんな彼と初めて向き合った沙由奈はあらうことか恋に落ちてしまう。

「ぼれたコーヒー

隣のデスクから雪崩なだれが押し寄せて来たのは何も今日が初めてではない。

昨日その書類の山が9合目^{なめ}に達したのは知っていた。

10合目、つまり限界の高さまで2・3日かかると踏んでいたわたしの予想は大幅にはずれ、お気に入りのキャラクターのマグカップをまき込みながら、紙の山が崩れてこちらに迫ってきたのだ。

「ああああああ……」

まるでスローモーションの世界。

たった数秒間の出来事が何分もの長さに感じ、今もなお書類がなだれこんで来る。

マグカップのコーヒーが残りわずかだったのは不幸中の幸いだけど、誕生日に同期の花山からもらつたタオル地のハンカチが書類の下で琥珀色に染まっているだろ^うことは避けられないだろ^う。

「もお——つ！植山先生。いい加減にして下さい……」

いくら観音様のようなわたしでも今回ばかりは堪忍袋の緒が切れた。

せっかく出来上がった冬休みの保護者だよりの原稿も、書類の下敷きになってしまったノートパソコンのキーボード部分を見る限り、画面から消えてしまっていてもなんら不思議はない。

早めにバックアップを取つておくべきだつたと思つたが。……後の祭りである。

「す、すみません。またやつてしまつた……」

頭をポリポリ搔きながら、その首謀者が誤つてくれるのはいいけれど、壊れた書類をガサゴソと寄せ集め元のように積み重ねるだけで、じぼれたコーヒー や保護者だよりの消滅はそのまま知らないふり……。まさか、気付いてない?

「あのですねえ、植山先生!わたしの机の上、どうしてくれるんですか? 今日放課後2時間もかかつてやつとあと少しどこりまで出来てたのに。冬休みの保護者だよりの原稿、パーになつちやつたんですけど」

ほんとうはこんなこと、言いたくはない。

ただ知らないふりされるのが癪に障るので、ちょっとオーバーアクションで不満をアピールしてみたのだが。

この男には「れぐら」強く出て、ちょ「づじ」のだ。

一瞬何の事かわからなかつたのか、わたしの顔を見てキョトンとしていた隣の主は、視線をデスクの上に移すと慌てて立ち上がり、給湯室の方に向つて走つていつた。

今度は早送りのアニメでも見ていくようなスピードィーな展開。

雑巾を手にした彼が瞬く間に現れ、こぼれたコーヒーを拭き取り、また給湯室にもどつていく。

あつといつ間の出来事。

何も言えなかつたわたしは、ただ呆然とその様子を見ているだけだつた。

地元の教育大を出た後、すぐこの翠が丘小学校に勤務して3年目になる。

よつやく仕事にも慣れ、子供たちとの日々も楽しめるよつになつてきた。

で、隣の雪崩男。

うえやまたつき
植山達樹といつこの男は教師歴6年目の先輩であるにもかかわらず、

いつもこのありさまだ。

わたしが新任でここに着任してきた時、隣の校区から彼が転勤してきたのが縁で、知り合つて3年目になる。

でも、話すことといつたら仕事の事ばかりで、お互にプライベートはあまり知らない。

教職員住宅の独身寮に住んでいるので一人暮らしにはちがいないの

だろうけど、彼女がいるのかどうか、はたまた休日は家で何をしているのかなどはまったくもつて謎のままである。

別に興味もなかつたので敢えてたずねることもしなかつた。

そんな植山だが仕事は出来る方だと思つ。

わたしと同じ6年の担任をしているが、もう3回田とこうだけあって仕事内容にも慣れていて、リーダーシップを取つてうまく学年をまとめてくれる。

高学年になると宿泊の行事も増えるので、独身族は身の軽い分、様々な仕事が振りかかつてくるのは否めない。

あと2人いる6年生担任はキャリアを積んだ50代の女性教師木津と、おもいっきりマイペースな40代の筋肉教師平木だ。

どちらもいい人なんだけど、仕事の逃げ方もつまい。

木津先生はおつとりとしていて細やかな気遣いのできるママさん教師の鏡のような人。

何かにつけて、若い人の意見はいいわねえ、その意見に賛成、と全ての責任を擦り付けるようにこちらに仕事を振つてくる。

あれこれ文句をつけて先輩づらをされるのもつとおしいが、すべておんぶに抱つこむキツイものがある。

筋肉教師に至つてはストイックなぐらい自分に厳しく、毎朝20キロの道のりを自転車で颶爽^{さうそう}と通勤してくるのだ。

趣味のトライアスロンに忙しく、これまた学年行事の運営全てが植山の肩にのしかかる。

初めて6年生を持つことになつたわたしも、植山に頼つていろどいろは多い。

去年の5年生の担任の時も同じ学年だったのでも腐れ縁ともいふのがもしかれない。

いや、かなりお世話になつてゐるといつた方がいいのかな。

こんな劣悪な環境の中でも文句ひとつ言わず黙々と仕事をしている彼には、正直頭が下がる。

だからよれよれのジャージ姿でも、寝癖のついたままの髪で通勤してきても、何も言わず大目に見て來た。

でも……だ。

それとこれとは話は別である。

びつじてそんなに、デスク周りが乱雑なんですか？

2段目の引き出しの中身がつつかえて開かないまま3ヶ月も放つておるのは、いくら氣の悪い性格だとしても限度があると想つのですが……。

採点用の赤ペン、2本貸したままになつてゐるのはもうありあま

す。

でも……。貸してもいなしのわたしの黒のマジックがあなたのペン立てにわざわざつけてあるように見えるのは、まほろしでしょうか？

職員室の教頭の机の上の壁にかかっている時計の針が8時を指している。

どおりでお腹が空いて来たわけだ。

向かいの席の木津も筋肉教師も、もちろんもつ帰宅してそこにはいない。

残っているのは、教頭と養護教諭の佐藤と隣の植山だけ。

わたしはノートパソコンを閉じると、返つてくることのない赤ペンに別れを告げるべく、隣のトライブルメーカーに帰ると黙つて席を立つた。

一心不乱に数字ばかりのパソコン画面を見ていた植山が急にわたしに向き直ると

「送るよ……。今日俺、車だから」

と言つなりパソコンの電源を落とし、足元にこりがつていた大きなスポーツバックを拾い上げ、教頭に「お先です」と軽く会釈をしてあつと言つ間に廊下に出て行く。

田の前で起つていてことの意味が呑み込めないまま、先に出て行

つた植山の後を追つよしにわたしも小走りでついて行つた。

アオキ

植山の車は学校北門付近の校舎裏手に停めてあつた。

シルバーグレーのスポーツカータイプのそれは、いつ見てもまるで彼に似合わない。

ともすれば仮装の小道具のようさえ見えてしまはうほど違和感があつた。

乗せてもらうのは初めてではない。

研修で他校へ出向いた時などに、何度か乗せてもらつたことがある。

ただし2人つきりではなく、他の先生も一緒だつたのだが……。

うながされるまま助手席に乗り込むと、ケーブルでカーナビにつながれた携帯型MP3が静まり返つた車内にアオキの歌声を響かせる。

バラードが絶品の邦人歌手アオキのクリスマスソングの限定アルバムだ。

男性にしては高音なその甘い声にメロメロになる女性ファンは多い。わたしもその一人だつたりする。

「先生もアオキのファンだつたんですか？」

黙つたままでいるのも氣まずいので、当たり障りのない話題をふつてみる。

「うん。声もいいけど、彼の曲想が好きだつたりする。このアルバムはクリスマスソングが中心だから彼のオリジナルは少ないけど、今一番気に入つていてるかもしれない。先生もつてことは林田先生もファンなの？」

「え、ええ……。まあ……」

な、なんでこの男、アオキが好きなんだ。

お互い同じアーティストのファンだとわかれば、もっと盛り上がりでしかるべきなのだけど、なにせ相手は植山だ。

彼と同調しなければならないほど友人に不自由はしていない。

車だけでなく、好みの音楽まで彼に全くそぐわないと思つてしまふ。

植山なら、70年代のフォークとか演歌つてイメージだ。

いやフォークが悪いと言つてるわけではない。現にいいなと思つて曲がいくつかあるしね。

ただ彼の場合、わたしの父親世代の趣味嗜好と重ね合はせてしまつだけのインパクトを常田頃放つてゐるのだからそつと思われても仕方ないのだ。

いつの間にか駅を通り越し高速のゲートをくぐる。

ETCのバーが田前に迫り、このままぶつかつたらいつもつねどとありえない想像をしながらも難なく通り抜ける。

こつもいひやう思ひのはわたしだけだらうか？

予想もしていなかつた成り行きに少し慌てる。

「あの……植山先生？すぐそこ」の駅でよかつたんですけど……」

電車に乗れば1時間ほどで住んでゐる町の最寄駅に着く。駅からは自転車で10分ほど。

学校からのバスの時間も入れると通勤に1時間半もかかるけれど、慣れればそんなに苦ではない。

でも高速を走つても50分くらいはかかる。

ただの同僚にでかけてしまつてのせはつが引けるのだが。

「気にしないで……。家まで送るよ」

「で、でも、遠いし。先生の帰宅時間が遅くなつますよ」

「いいから、まかせておきなさい。あつ……。とにかく、お腹空かない？」

せりふで、空いてます……ってこの展開。

やつと一緒に食事でもつてことだよね。

彼と2人で食事つてこののは、どう考へても想像すらできないあるいはシチュエーション。

「す、空いてるつていうか、や、その……なんていうか……」

「君たちの近くのインター付近にこんなあるよね。そこで晩飯食おうよ。帰つてから作るのもめんどくせっこ、一人で食つのも……ね？」

……ね？ つて言われても、わたしの場合、家に両親と双子の弟もいるので一人の晩御飯はあまり経験がないのだけだ。

そうだ。この人一人暮らしだから、寂しいんだ。

たまには、付き合つてもいいか……。

なんと呟つても今夜はこいつして送つてくれるんだし、無碍に断る事も出来ないなと、やつきの職員室での怒りはこの際封印して、うん、と頷いてみた。

「よしー。やつと決まれば、目的地に直行だ。やつたー。」

やつたあ？ 何それ？

聞き捨てならない彼の言動に少し動搖したわたしは、気付かれないように横で運転している人物をそつと盗み見る。

するどいだらう。にこにこと嬉しそうに微笑みながら、アオキに合せて鼻歌まで歌い出す始末。

ステアリングに添えられた右手の人差し指は、音楽に合せて軽くリズムまで刻んでいるではないか。

えつ？待つて……。

初めて見たわけではないのに彼の横顔が別人に見える。

あんなに鼻が高かつたつけ？

それに彫の深い目元にくつきりした眉。

相変わらずヘアースタイルはなんとも形容し難いけれど、日焼けしたその横顔は、わたしの目を釘付けにするのに充分なほどかっこいい。

そんなことあるはずがないと、必死で頭の中で考えたことを打ち消そうとするけど、自分の意思ではもうどうにもできない。

念のためもう一度見てみると、突然こっちを向いた彼とおもいつきり視線がぶつかってしまい、はっと息を呑んだ。

奥二重の黒目がちな瞳に、わたしの心は一瞬にして驚づかみにされてしまったのだ。

これって、もしかして……。

恋に落ちたのだろうか。このわたしが植山に？

あいつ、いつくつ

インターに到着したのは9時前だった。

この付近の店はほとんどが深夜も営業している。

閉まってしまう心配はまだないので、仕事帰りのサラリーマンには
ありがたい一角だ。

「林田先生は何が食べたい？」

急に聞かれてびっくりしたわたしは、使えない女の定番ワードを
発してしまった。

「な、何でもいい……です」

植山もそんなわたしの返答に驚いているのがわかる。

普段わたしは意外とものはつせつと語りタイプだ。

自分ではこれでも言いたい事の半分も言えない控えめな女性であると思つてゐるのだが。

皆で連れ立つて食事に行つても希望のメニューを真つ先にオーダーするには当然のこと、みんなの注文も取りまとめるのがわたしの使命だと信じて疑わない。

そんな時、みんなと同じでいいとか、なんでもいいって言う主体性のない人物に容赦がないのも周知の事実。

そんなもんくらいい、わざわざ自分で決めりつづーのー。

なのに……なのに……。

一番嫌いな台詞をこのわたしが口にするとは……。

「林田さんがなんでもいいなんて珍しいね。仕事が長引いた時の夜食の注文も、てきぱき取りまとめてくれるのに。なんだかいつもの林田さんじやないみたいだ」

珍しい生き物でも見るよつに植山はつぶやく。

でもそつとあんたもいつもの植山でないよー

だつて、さつきから違和感ありすぎだし。

なんだらう?

先生抜きで苗字で呼んでくれたからかなあ？

年下のわたしにもいつも敬語で話しかけてくる彼からは、『林田先生』と先生付きで呼んでもらったことしかないのだから。

同期や親しい先輩の先生方は、沙由奈をむじつてさゆぢゃんと呼んでくれる。

逆立ちしたつて彼がそんな風に呼ぶわけもなく、仮に呼ばれたとしても身体が受け付けずに、拒絶反応を起こしてしまつだけだとまは思うが。

でも今一瞬、そう呼ばれてみたい気持ちになつたのには正直参る。

「じゃあ、ラーメンでいい？」

えええー！ラーメンかよーと、なんでもいいと言つておきながら、心中でおもいつきり彼に突っ込んでしまつた。

嫌いじゃないけど、ちょっとといこムードの2人がラーメンね……。

やつぱり植山だわ、と思つたのもつかの間、

「あそここのガソリンスタンドの隣のラーメン屋、去年できたばかりだけど結構いけるらしいよ。インターネット外食部門ランキングで市内1位になつてたくらいだし。チャーシューが半端なくうまいんだって。スープもあつさつ、ひっくりなんだってさ」

などと切り出す。なんだ、ちゃんと調べてるんじゃない。

あつさり、こつこつてよくわかんないけど、結構有名な店なんだ。

ランキングで市内1位だつてことももうりん知らなかつた。

……つて、さつきからモヤモヤしていた理由がわかつた！

彼が敬語を使ってない。

学校に着任した当時は初対面だから敬語もアリと思って気にしなかつたけど、3年たつた今でもずっと敬語で話しかけられていたので、かなりの堅物か変人だという結論でどうにか彼を理解するように努めていた。

でもさつきから、普通に話してゐよね。

どうつで調子狂つちやうわけだ。

今まで知らなかつた彼が次々と姿を現す。

なんだか今夜はおもしろいことになりそつだ。

髪はぐしゃぐしゃで、よりよれジャージを身につけてゐるけれど、結構頼もしくていい奴に見えてくる。

……不思議だ。

この3年間、わたしは彼の何を見ていたのだろう?

いや、見ようとしていなかつただけなのかもしない。

や二のラーメンは植山の言つとおりとでもおいしかつた。

なるほどこれがすつきり、いいへりうね。

実際食べてみなきやわからんことはよく言つたものだ。

「でも彼は饒舌だつた。

仕事の事や一人暮らしの苦労話、趣味のスキーのことなど今まで知る由もなかつた彼の日常が明らかになつていく。

前年度の1月後半にあつた5、6年生のスキー合宿で見た限り、かなりの腕前だとは思つたけど、公認指導員の資格まで持つてるとは驚きだ。

だつて何も言わないんだもの。

おまけにアルペン種目で国体の次点候補にまでなつたと聞いた時は、ラーメン屋のカウンターの高めの椅子からマジで落つこちそうになつたのだから。

わたしと植山の住んでいる県は、北部は山々が連なり、豪雪地帯もあるので結構ワインタースポーツが盛んな地域もある。

彼の母方が北部地域にあつて、小さい頃から自然とスキーに

親しんできたらしい。

わたしもスキーは嫌いじゃない。

県南部出身だけど、小中高と学校からのスキー教室のおかげで、そこそこ滑れるようになっていた。

大学でスキー同好会に入ったのを機に、信州や県北部で過ごす事が多くなりスノーボードにもはまつた。

最近は小学生相手とこうともあって、もっぱらスキーなんだけどね。

わたしが目をランランと輝かせてスキーの話を聞くものだから、いつの間にか春休みに立山方面に春スキーと一緒に行こうと話がまとまってしまっていた。

あっ、でも安心して。2人つきりじゃないみたいだから。

彼のスキー仲間も一緒に取り敢えずはOKってとこかな。

それから急に神妙な顔つきになると、いつもわたしに迷惑をかけてすまないとも言ってくれた。

わたしってそんなに怖かったのかな?と逆に恐縮してしまった。

わたしの方こそ仕事ではいっぱいフォローしてもらっているの。

でもあの山積み書類は整理しようねとやんわり注意しておくれ」とは

忘れなかつた。

その後隣の喫茶店で「コーヒーまで」駆走になつてしまい、家に送つても「うつたときには、あと一分ほどで夜中の〇時になると」うつた。

ほんとうにあつとこいつ聞の数時間。

それもあの植山とこんなに長時間2人つきりで過ぐしたなんて、どう考えても信じられない。

その上、別れ際になんて言つたと思つ?

「朝は無理だけど、帰りは毎日送るよ。いいかな?そもそも俺の罪滅ぼし。それと、君の携帯のメールアドレス教えて。電話番号しか知らないから」

そういういで、ペンケースから「ノード」ペンを取り出す。

毎日送つてくれるのは本気ですか?ちょっと嬉しかつたりするこのことなの?……わたし。

アドレスのメモなんてしなくても空メール送つて登録しつければ済むことなの?……。

実は彼の携帯、もう1週間も充電しないでそのまま放つてゐるんだって。信じられる?。

彼が手にしたのはビニカで見た」とある赤ペン。

そ、それって、わたしのペンだよーと思わず心の中で声を大にして叫んでしまった。

彼の手元を見るわたしの視線に気が付くと、悪びれることなくいつに

つた。

「このペン、返したくなかった。君をずっと手放したくなかったから……」

彼の部屋の机の上に、もうひとつわたしの赤ペンがころがつているのを知ったのは、それから20日後のクリスマスイブの夜だった。

おわり

(後書き)

メッセージを下せつたHさんへ。

Hさん。7/13にメッセージを送つて下せつて、ありがとうございます。
いました。

このあかペんのゆくえですが、私としましても、しつかりと改稿して続きも書きたいなと常々思つております。

ところが諸事情でなかなか実行できずにいます。大変申し訳ありません。

今、小説家になろうに投稿をせて頂いている作品すべてを、ホームページ（あんだんて小説館）に移転中です。

その時に、本文を改稿、加筆して転載しておりますので（かくれんぼ、そばにいては移転終了。こんペいとは移転中です）、あかペンのゆくえもいすれは…と思つている次第です。

しばらくお待たせすることになるかと思いますが、また再開しました時にはこちらでもお知らせしますので、お立ち寄りいただければ嬉しく思います。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

大平麻由理
2009年7月15日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1857d/>

あかペンのゆくえ それはイブの夜に
2010年10月21日23時38分発行